ここまでわかった

鞠智城

第4号

土塁跡

城門跡

鞠智城を取りまく土塁と城門
その調査成果について紹介します。

鞠智城の防衛の要、3つの城門と

鞠智城の土塁線と城門跡の位置

鞠智城跡からは、深迫門、堀切門、池ノ尾門の3カ所の城門が見つかっています。深迫門、堀切門、池ノ尾門の3カ所とも、門のつくりかたが異なりそれぞれ特徴があります。なお、門の礎石はいずれも花崗岩製です。特に堀切門の礎石は、一つの石に2つの軸摺穴が設けられており、門の幅がわかる貴重なものです。また、堀切門では、城外からの登城道と思われる遺構も確認されました。池ノ尾門では、石塁や水を排水するための通水溝などが確認されました。

土塁は、外部からの敵の侵入を防ぐもので、やせ馬の背のような自然地形を造成し、土を盛るなどしてつくられています。もともと尾根状になっており、そのままでも防御性の高い自然地形であったものを、さらに土塁を造ることで防御性を高めています。この土塁は、土を太い棒状の工具で突き固めることを何度も繰り返すことで強固な壁をつくる「版築」という大陸伝来の技法が使われています。

城門や土塁線は、白村江の敗戦後に大和朝廷によって鞠智城が築城された際に、防衛施設としての機能を持たせるために、真っ先につくられたものと考えられます。

自然地形を利用した土塁線

南の守り 堀切門跡

堀切門跡は城域の南側に所在し、標高は約122mをはかります。これまでの発掘調査によって、門礎石１基の他、門跡、側溝を伴う道路跡、岩盤削り出しと盛土によって形成された城壁等が確認されるとともに、少量の須恵器や瓦などが出土しています。

堀切門跡全景

確認された門礎石は、一石に２つの軸摺穴が存在する大変珍しい形態で、両軸摺穴間の距離は約2.8mあります。堀切門跡では、門の支柱になると考えられる柱穴が見つかっており、鞠智城跡の城門跡の中で唯一、門跡の原位置が判明しています。

なお、堀切門は城の南に位置することから、鞠智城の正門であったとも考えられています。

東の守り 深迫門跡

深迫門跡は城域の南東隅に所在し、標高は約123mをはかります。これまでの発掘調査によって、地元で「長者どんの的石（まといし）」と古くから呼ばれてきた門礎石１基の他、版築土塁やそれに伴う柱穴、石列などが確認されるとともに須恵器などが出土していますが、具体的に門がどのような構造であったのかはわかっていません。

深迫門跡全景

版築土塁は谷部を挟んだ南北両側で検出され、それぞれ高さが４m以上あり、裾部には土留めのための石列を置く構造となっています。また、同じく土塁裾部からは1.8m間隔で並ぶ柱穴が南土塁で７基、北土塁で８基見つかっていますが、これらの柱穴は版築で土塁を築く際に用いた支柱の痕跡であると考えられています。

散らばった石が往時の姿を思い起こさせる
西の守り　池ノ尾門跡

池ノ尾門跡全景（東から）

池ノ尾門石塁背面石積み検出状況

石塁背面の一部で石積みの跡が確認されました。石は加工されたものではなく、採取された石がそのままで積まれたものでした。

池ノ尾門跡は、標高約90mと鞠智城跡の中でも最も低い位置に所在し、西側、南側土塁線の尾根に挟まれた狭い谷部に位置します。

これまでの発掘調査によって、１つの軸摺穴が残る門礎石１基の他、石塁、通水溝、導水溝、盛土状遺構などが確認されています。

池ノ尾門跡は他の門とつくりが異なり、石を積み上げた石塁が構築されていたことが分かっています。石塁はそのほとんどが崩落しているものの、幅は約9.6mであったことが分かっています。石塁の下には通水溝が通っており、これは暗渠状の排水施設で全長約16mの規模です。通水溝の取水口前面には導水のための導水溝が確認されています。なお門自体がどのような構造であったのかについてはわかっていませんが、通水溝よりも北側、現在市道が通っている部分にあったものと考えられています。また、石塁の北西側20mほど離れた地点には版築工法を用いた土塁状を呈する盛土状遺構が存在します。

この池ノ尾門を出て現在の市道を下っていくと、「大門」と呼ばれる地点にたどり着きます。ここは菊池川をつたい有明海まで流れる初田川沿いにあたり、古代宮道「車路（くるまじ）」にも隣接する地点に当たります。そのため、池ノ尾門が鞠智城の正門であったという考えもあります。

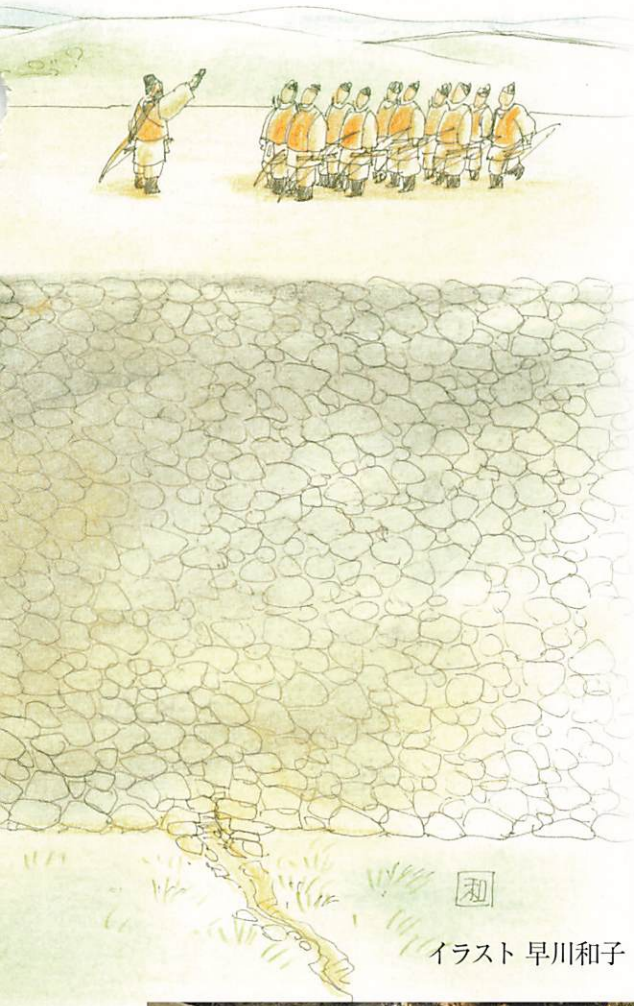
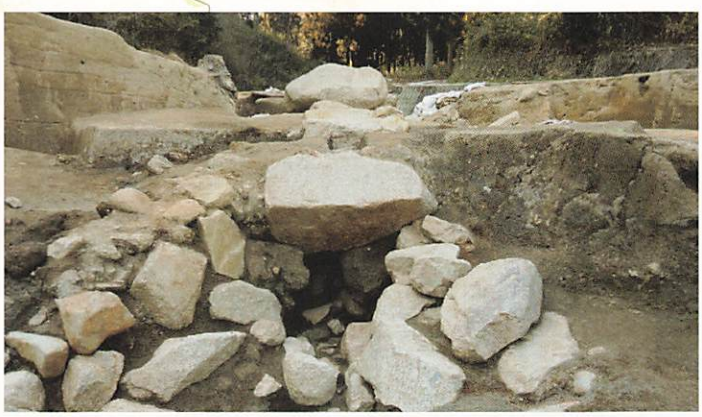


イラスト 早川和子



池ノ尾門の水門

池ノ尾門の石塁の下にある暗渠状の通水溝の入口に当たる水門です。ここから入った水は石塁の下を通って、城外へと排出されました。石材は花崗岩が多いのですが、これはこの周辺の地盤が花崗岩であるため、周辺で採取できる石材を使用しているものと考えられます。

通水溝土器出土状況

水門から入ってすぐの通水溝の内部から1点の土器が検出されました。この土器が置かれる前に、通水溝は土砂の堆積で埋もれていました。この土器の年代は8世紀末ごろのものですので、通水溝はこの時期に使用されなくなったと考えられます。

版築という大陸伝来の先進技術で土塁を構築

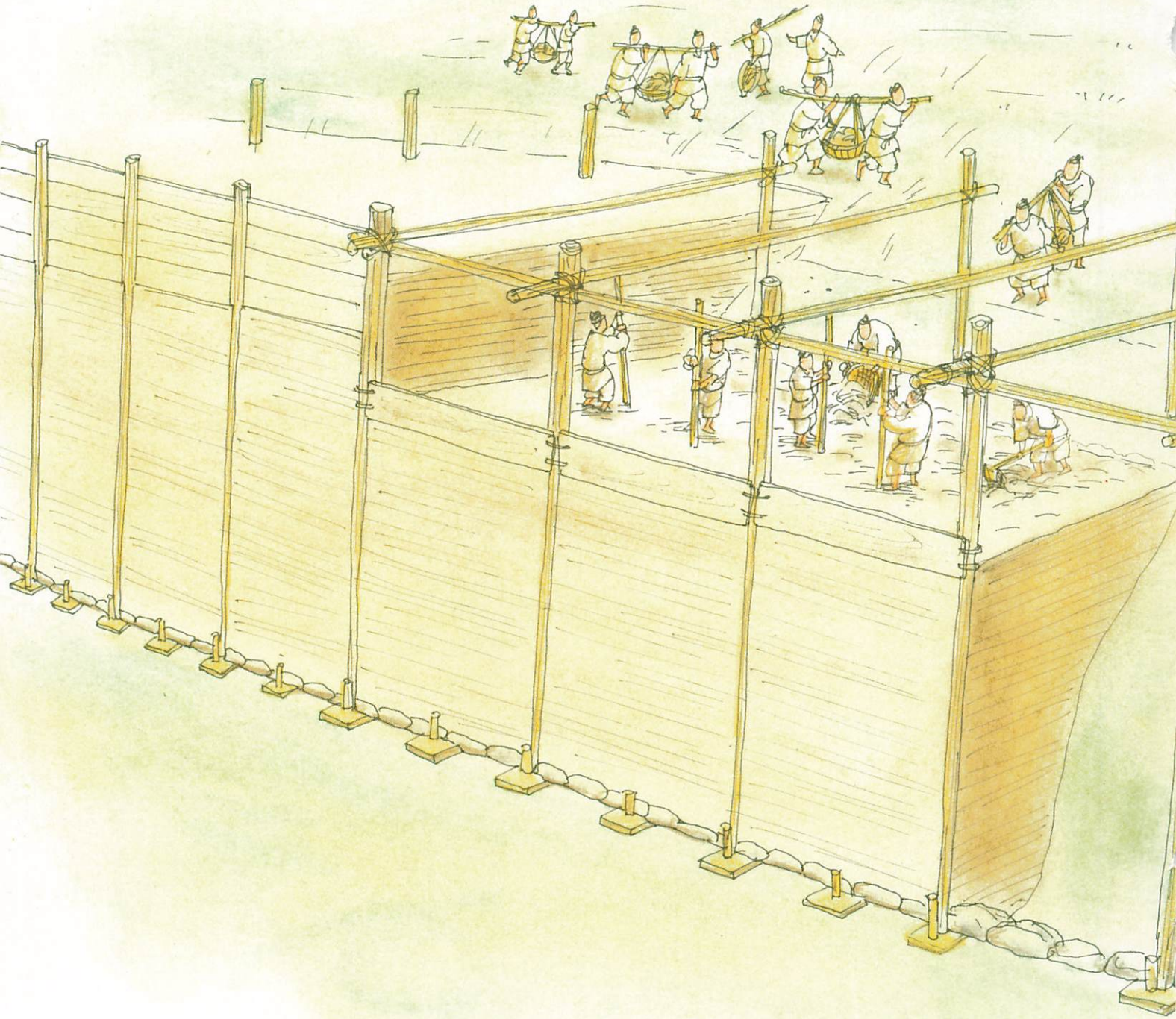


イラスト 早川和子

土塁は、外部からの敵の侵入を防ぐもので、やせ馬の背のような自然地形を造成し、土を盛るなどしてつくられています。土塁の構築には、土を突き固めることを何度も繰り返すことで強固な壁をつくる「版築（はんちく）」という大陸伝来の技法が使われています。

南側土塁線は、城外から眺めると高く切り立った凝灰岩の岩壁が目の前にそびえ、その上部に版築土塁が構築されるという形になります。もともとの自然地形が高い防御性を持っているのに加え、さらに版築土塁を構築することで防御力を向上させています。この土塁は中位にテラス部を設ける２段構造になっています。

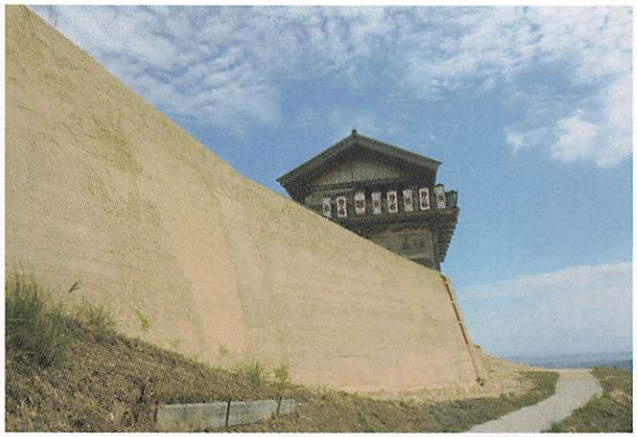
これに対し、西側土塁線は馬の背状の尾根が続き、その途中に灰塚（はいづか）、涼みヶ御所（すずみがごしょ）、佐官どん（さかんどん）といった頂が連なる起伏に富んだ地形となっています。この尾根の上部に土塁が構築されていますが、南側土塁と異なり西側土塁はテラスを設けず、土塁の基底部までほぼ垂直に切り落とす形の構造となっています。

南側土塁と西側土塁のこのような構造の違いは、鞠智城が南向きの城であるため、南側は城の堅固さ壮麗さを見せるための視覚的効果を狙ったのに対し、西側は防御機能を重視した実用本位のものであったという考えがあります。また、南側土塁線の基盤層は阿蘇溶結凝灰岩、西側土塁線の基盤層が花崗岩あるいはそのバイラン土と異なるため、それによる地形造成のしやすさなどに起因するという事も考えられます。

南側土塁線
左側が城外。城外に向かって２段になっている土塁が構築されています。

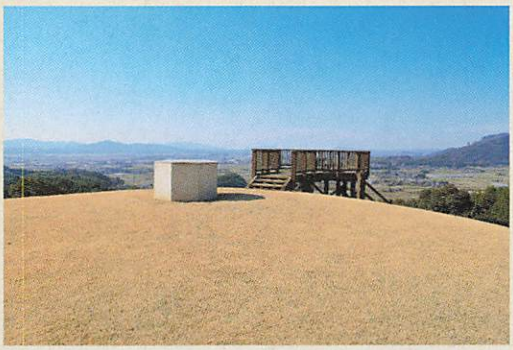
西側土塁線
左側が城内、右側が城外。城外の方が急な傾斜、城内の方が緩やかな傾斜になるように土塁が構築されています。

西側土塁線の版築
土塁は版築技法で構築されています。版築は土を突き固めることを何度も繰り返すことで、強固な土塁を構築する技法です。鞠智城では、土塁、城門などで使用されています。



復元された版築土塁（岡山県総社市鬼ノ城（きのじょう）跡）
鬼ノ城跡では、当時の工法により版築土塁が復元されました。写真は城外から見た様子ですが、往時の鞠智城の西側土塁線にも、このような垂直に近い角度の土塁が構築されていたものと考えられます。

西側土塁線のよもやま話



灰塚

灰塚からの眺望

涼みヶ御所

佐官どん

西側土塁線は馬の背状の尾根が500mほど続きますが、その途中に灰塚、涼みヶ御所、佐官どんといった頂が存在します。これらの頂には、鞠智城や地域に伝わる伝説に関連するものがあります。

灰塚は西側土塁線の一番南側に位置する頂で、標高165mの地点になります。現在は展望所として整備され、360度の眺望を楽しむことができます。灰塚という名称ですが、この灰というのが、烽火をあげるために使った材の灰であるとされ、このことから灰塚は烽火台があった地点ではないかという事が考えられています。しかし、現在のところその痕跡は確認されていません。

その北側に位置する頂が、涼みヶ御所と呼ばれる地点です。地元の伝説に米原長者伝説というものがありますが、涼みヶ御所はこの米原長者が涼むための場所だという伝承があります。また、「烽見ヶ御所」とも呼ぶことができ、ここも灰塚と同じく烽火を確認する望楼のような施設があったのではないかとも考えられています。未調査地点ですので、今後新たな発見があるかもしれません。

最も北側に位置する頂が、佐官どん（しゃかんどん）と呼ばれる地点です。ここは鞠智城内における最高所、標高 171.1m地点になります。現状は小さな塚があるような状況ですが、「佐官どん」という名称から、鞠智城に派遣されていた役人に関連する地点であることが想像されます。

この電子書籍は、ここまでわかった鞠智城 4 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：ここまでわかった鞠智城 4　城門跡土塁跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2002 年 8 月 18 日